

F—20 農家生活の変貌に関する研究(第3報)
—(その2)農家の生計基盤についての
地域別考察—

青葉学園短大 鹿股寿美江
○菊池 公子

1. 本研究は、1970年4月の時点における農家生活の実態を把握する為、農家の生計基盤についての地域別考察を行ない、これからの農家のあり方の一つの指針となることを目的とした。

2. (その1)と同様に地域を選定し、一つかまどのめしを食べているものと、別かまどのものにと分類して考察した。

3. A, B, C 地区はいずれも米作地帯で生計は米収入への依存度が高い。むろん自給用のそさい、養鶏を行なっている。しかし、米の単作故に半年は余剰労働力をもつ。その余剰労働力のはけ方が農家生活のあり方を左右していると考えられる。まず、季節労務に出ている状態は、Aは1ha以上2haまでの階層が1世帯当り1人、1ha未満の階層が0.4人である。この階層は固定的農業外の仕事に従事している者が1世帯当り0.8人でAで最も高い率を示す。Bの1ha未満の階層は1世帯当り0.07人で低率であるが、周辺の会社、工場への通勤が可能で、固定的農業外の仕事に1世帯当り1人従事し、Aとの社会的、経済的条件の差異がはっきりと読める。Cは1世帯当り1人以上、1ha未満で0.5人である。つぎに転出の状況をみると、Aは1世帯当り0.38人、Bは0.12人、Cでは0.57人である。さらに、県外、県内に世帯を持っているものについて考察すると、Cは、県外が1世帯当り0.4人、県内が1人、村内が0.06人でA, Bと異った様相を呈している。